

東博史大使からのメッセージ（大使館便り173号より）

盛夏の候、皆様におかれましては、御健勝にて御活躍のこととお喜び申し上げます。

（1）ポルトガル博物館学協会より当館に対する国際協力貢献表彰受賞式への出席

（ア）6月10日、私は、ソアレス・ドス・レイス国立博物館（ポルト）において開催されたポルトガル博物館学協会年次総会に出席し、同協会より、当国美術館・博物館等に対する国際協力での顕著な貢献が認められたとして、当館に対する表彰を受けスピーチしました。

（イ）ポルトガル博物館学協会（Associação Portuguesa de Museologia）は、1965年に当国美術館・博物館の発展を促進するべく設立され、国内主要美術館・博物館や学芸員を会員とする組織です。同協会が毎年発表する最優秀博物館賞は、当国博物館の「オスカール」とも評されています（本年は、昨年開設されたリスボン所在の貨幣博物館が受賞）。これにあわせて、例年、当国の博物館・美術館に対する国際協力での顕著な貢献が認められた国（大使館）に対する表彰が行われています。

（ウ）当館の受賞

（1）当館は、昨年6月21日、森富山市長一行による当地ファルマシー博物館に対する展示品寄贈に取り組んだ経緯があります。ファルマシー博物館は、ポルトガルのみならず、大航海時代を含めて収集された、世界の調剤および薬局の歴史を紹介した珍しい博物館です。一昨年来の同博物館館長からの依頼を踏まえ、エボラ南蛮屏風下張り文書の「松任町文書」の関係者として、昨年2月にポルトガルを親善訪問され、ファルマシー博物館を視察された「クスリのアオキ」の青木会長の御紹介で、富山の（株）廣貫堂の協力を仰ぎ、同日、森市長の立ち会いの下、廣貫堂よりファルマシー博物館に対して、柳行李、薬箱、そろばん、懸場帳、石版、薬パッケージ等の「富山の薬売り」を紹介する歴史的価値の高い展示品が寄贈されました。

（2）また、これまでも「東大使メッセージ」でも御紹介してきました通り、現在、ソアレス・ドス・レイス国立博物館（ポルト）の南蛮屏風下張り文書修復事業を支援しているところです。

（3）今般、上記2件の取り組みにつき、ポルトガルにおける美術館・博物館の発展に大きな貢献が認められたとして、当館に対する表彰が決定されました。なお、本年、本件表彰を受けたのは「日本」のみでした。

（4）私は、約200名の当国主要美術館・博物館館長ほかの出席する受賞式典において、概要以下のとおり挨拶を行いました。

本件受賞は大変に嬉しく名誉である。ファルマシー博物館に対しては、「富山の薬売り」という我が国独自の文化の展示に協力頂き深く感謝している。今後、ソアレス・ドス・レイス国立博物館の南蛮屏風下張り文書の修復等を通じて、引き続き両国の相互理解および関係緊密化に向けて、大使館としても、これら事業に対する協力を進めていきたいと考えている。



表彰状



東大使挨拶



ネト・ポルトガル博物館学協会理事長への挨拶

挨拶

(2) 長崎日本ポルトガル協会一行のポルトガル訪問

(ア) 7月3日、私は、長崎市の姉妹都市であるポルトの市庁舎を訪問し、長崎日本ポルトガル協会一行親善訪問団の歓迎式典に出席しました。

同式典では、リカルド・ヴァレンテ副市長から歓迎の辞が述べられ、宮脇雅俊会長から今次訪問の意義や来年の予定等について挨拶され、私からも歓迎の辞を述べました。

特に、宮脇雅俊会長からは、ペトロガン・グランデの森林火災に対するお見舞いに言及された上で、「長崎日本ポルトガル協会は1968年に駐長崎ポルトガル名誉領事館の設置に合わせ設立され、来年設立50周年を迎える。その間10回ポルト市を訪れており、今回が11回目の訪問である。長崎港がポルトガル人により開港されて400年に当たる1970年に長崎で、日本の皇室のご臨席を仰ぎ、開港400年記念祭が開催され、その際には世界的大スターアマリア・ロドリゲスさんにも来日いただいた。翌1971年、開港400年祭の答礼を兼ねて協会が発足して初めてポルト市を訪問し、そして1978年に姉妹都市提携に至り、来年は、姉妹都市締結40周年を迎える。今年10月には長崎を代表するお祭り「くんち」で、ポルトガル船を表現する『南蛮船』が7年ぶりに神様へ奉納する出し物として披露される予定であり、その際駐日ポルトガル大使を長崎にお招きして『南蛮船』を観ていただき、ともに協会設立50周年をお祝いする予定である。このように、長崎では、お祭りや生活の中で400年以上にわたるポルトガルとの繋がりを守り続けており、長崎市とポルト市との姉妹都市交流は日ポ両国の親善交流において重要な位置づけにあると考えている。今回の親善訪問を機に、微力ながら姉妹都市交流事業に協力し日両国の発展に寄与したいと思っている」旨挨拶されました。

(イ) 翌7月4日、リスボンにおいて、私は、宮脇雅俊会長とともに、リスボン市庁舎のカストロ市国際担当政務官、外務省のオリベイラ国際担当外務副大臣、国会のティアゴ・ポルトガル・日本友好議員連盟副会長等を表敬しました。

また、親善訪問団一行は、ポルトガル・日本友好協会メンバー等と交流しました。

各種表敬、交流においては、今次訪問の意義、今後の交流の在り方等について意見交換し、これまでの姉妹都市間の人的交流、文化交流に加えて、2020年東京オリンピックにむけてのスポーツ交流の他、今後は、観光促進をはじめとして、貿易投資の促進につながるような経済交流の可能性についても検討していくこととなりました。

(ウ) 長崎日本ポルトガル協会設立50周年を祝する今回の訪問は、明年が、長崎市・ポルト市間の姉妹都市提携40周年にあたることから、長崎市長のポルト訪問等も検討されており、明年以降にもつながる両市・両国間の交流強化の良い機会になりました。

(3) 大分県、大分市職員のパルトガル訪問

7月13日、私は、大分県、大分市職員とともに、大分市の姉妹都市であるアヴェイロ市長を表敬し、今後の両市間の姉妹都市交流について情報・意見交換を行いました。特に来年2018年は大分市とアヴェイロ市の姉妹都市提携40周年を迎えることから同年には、大分市長、大分のサッカーチームのアヴェイロ派遣、アヴェイロ市長の大分訪問も予定されているとのこと。私からは、両市間の姉妹都市交流について、これまでの人的交流、文化交流に加えて、2020年東京オリンピックにむけてのスポーツ交流の他、今後は、観光交流をはじめ両国産品の貿易や新規投資の促進等経済面での交流が重要であると考えている旨述べたところ、両市から賛同が得られました。

(4) JALチャーター直行便のリスボン空港到着

7月15日、私は、日本から初めてとなるチャーター直行便(関空発)が、リスボン・ポルテラ空港に到着する機会に、ペドロ・マルケス・ポルトガル企画・インフラ大臣とともに同空港に赴き、同便の搭乗客を歓迎しました。

(ア) その際、私からペドロ・マルケス企画・インフラ大臣に対し、「日本から初めてとなる(チャーター)直行便がリスボンに到着することは感慨深い。特に、マルケス大臣は、2014年にポルトガル・日本友好議員連盟の副会長をされていた時代から直行便の必要性を主張され、昨年7月に企画インフラ大臣として訪日された際にも、国土交通省や日本の航空会社と直行便の就航について話し合われたと承知しており、今回の(チャーター)直行便の就航によって、将来の定期直行便につながることを期待したい」旨述べたところ、同大臣は、「全く同感である。今次チャーター便は、本年夏の期間にJTBの企画により運航されているものであり、日本航空、全日空が運航すると承知している。昨年7月に訪日した際、全日空が、2020年東京オリンピックまでに南欧路線を新たに開設することを示唆しており、この実現を期待したい」とのお話がありました。また、「直行便の就航のためには、双方向の観光客の増加、特にビジネス客の増加が不可欠であり、近年の両国間の観光客の急増は良い傾向であるが、最近の丸紅のリスボン事務所の開設をはじめ日本企業のポルトガルへの進出が見られるところ、これらの動きを更に支援していく必要がある」ことについて意見が一致しました。

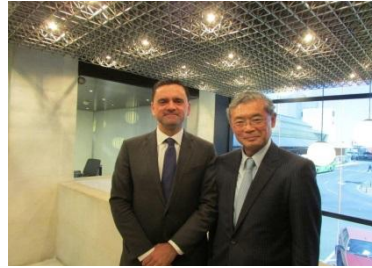
(イ) この直行便は、(本年予定されているチャーター)4便のうちの1便であり、日本の最大手旅行会社であるJTBの企画により運航され、日本航空と全日空による初めてのリスボン空港及びポルト空港への商用運航となります。

(ウ)(ポルトガルの空港運営会社である)ANA(Aeropostos de Portugal)は、「このチャーター便の運航は、単発且つ短期間のものであるが、(ポルトガルにとって)重要な市場である日本による(直行定期便の就航に向けた)実験的な性格を有するという意味で重要性を持つ。このチャーター便の成功は、今後新たな直行(定期)便の就航を検討する際の梃子になるであろう。また、リスボン空港、関西国際空港(をはじめとする世界の空港)を管理・運営するフランス企業ヴァンシ・エアポート社(Vinci Airports S.A.S.)とJTBは、日本からポルトガルへのインバウンドだけでなく、ポルトガルから日本へのアウトバウンドも追求しつつ、2018年夏までにこのチャーター便の運航を拡大させることを目指し、既に作業を行っている」との声明を発表しました。

(エ) なお、同便搭乗客歓迎の様態については、当地SICテレビのニュースで放映されたほか、ジョルナル・エコノミコ(オンライン版)、オブセルヴァドール(オンラインニュースサイト)等で報道されました。



乗客を歓迎



マルケス大臣と東大使



JAL乗務員との写真

(5) 綿貫宏介氏への公館長表彰

7月19日、大使公邸において、アーティストの綿貫宏介氏に対し、公館長表彰させていただきました。

(ア) 私は表彰式の挨拶で、概要次のとおり述べました。

(i) 1956年から10年に渡りポルトガルで生活されていた間に綿貫宏介先生が残された絵画作品は当地で高く評価され、多くの作品がグルベンキアン美術館をはじめとして、各地の美術館に所蔵されています。本年は、1957年の最初の個展開催から60周年にあたり、そのタイミングで綿貫先生をポルトガルにお迎えして、展覧会が再び実施されることを喜ばしく思います。

(ii) 綿貫氏の目を通して描かれたポルトガルの風景は当地の人々に驚きと感動を持って受け入れられ、特に1957年のリスボンでの個展の盛況ぶりは当時放送が始まったばかりのテレビでも大きく取り上げられたと伺っています。日本に帰国されてからはポルトガルアートの趣きや欧州のモダニズムを取り入れたパッケージデザイン等の意匠で日本にも根強いファンがおられます。両国の人々の友情・絆をアートをもって結んでこられたその功績を称え、本日ここに表彰致します。

(イ) また、綿貫氏とは1960年代からの旧友で、今回リスボン市内等での展覧会の実現に尽力されたペドロ・カナヴァーロ・カナヴァーロ財団総裁は次のとおり挨拶しました。

古い友人である綿貫氏とここポルトガルで再会でき、明日よりその作品を展示できることを嬉しく思います。我々ポルトガル人は、彼に描かれた作品を通じて改めて自分達の住む町の美しさを再発見できたのであり、ポルトガルの偉大な友人である綿貫氏に改めて感謝の意を表します。

(ウ) 同表彰式には、本邦より綿貫氏の親族、事務所関係者、綿貫氏のデザインを商品に使用している企業関係者、また当地で同氏の展覧会を企画・運営しているペドロ・カナヴァーロ総裁、クリスティーナ・カステルブランコ イネス・デ・カストロ財団理事の他、綿貫氏と1950～60年代に親交のあった美術関係者等も参加し、出席しました。

(エ) なお、今回予定されている綿貫宏介氏のリスボン市内の個展については以下のとおりですが、以下会場での展示の後、コインブラ市及び同氏とゆかりの深いマトジーニョス市でも展示が行われる予定です。詳細は、この「大使館便り」の3.広報文化関係を参照してください。

綿貫宏介展 “Agora Mesmo”

(ポルトガル国内所蔵の60作品を展示)

期日：2017年7月20日～8月31日

会場：国立美術協会 (Sociedade Nacional de Belas Artes) (リスボン)

(オ) 綿貫宏介先生は、豊饒としておられて、1950～60年代に親交のあった美術関係者とポルトガル語で交流されているお姿を見て、今もポルトガルの偉大な友人として、ポルトガル人から慕われる巨匠であることを実感しました。また、絵画については全くの独学とのことで、そのユニークな作風に強い感銘を受けました。その作品には、日本人の感性とポルトガルの美・雰囲気といったものが見事に融合しており、1956年にポルトガルに来られ、10年に及び先生が御自身の身近な生活の場で出会ったポルトガルの素朴な街並みを精力的に描かれましたが、カナヴァーロ財団総裁が「先生の視線を通して描かれたポルトガルが現地の方々に新鮮な驚きと感動を持って受け止められた」と述べられた

ことが実感できます。また、10年に及ぶこちらでの活動が大きな足跡を残すものであったことを物語っています。今後も、綿貫宏介先生を顕彰して行きたく存じます。



カナヴァーロ氏、綿貫氏、東大使



表彰状授与

(6)「三菱ふそう」の電気トラック「eCanter」生産開始式へのソウザ大統領出席

7月27日、私は、三菱ふそうトラック・ヨーロッパ社の当国中部アブランテス市・トラマガル工場における電気トラック「eCanter」の生産開始式に出席しました。

三菱ふそうトラック・バス社(本社:神奈川県川崎市)は、電気トラックのパイオニアとして、新世代車となる電気トラック「eCanter」を川崎工場とともにトラマガル工場でも生産を開始することになり、ポルトガルにとってもランドマーク的な重要なプロジェクトになる由。

同生産開始式には、ソウザ大統領、カブラル経済大臣、アナ・テレーザ・レマン経済省産業担当副大臣、アルブケルケ・アブランテス市長等が出席しました。

工場見学に際して、私からソウザ大統領に御挨拶したところ、同大統領は、「おめでとうございます。ポルトガル人と日本人が一緒になって電気トラックの生産に携わっている姿を見ることができて大変嬉しい」と述べておられました。

また、生産開始式典において、同大統領は、概略次のとおり挨拶されました。

(ア)ポルトガル、EU諸国、世界の国々が気候変動問題に直面している中、クリーンエネルギーはこの問題を解決する1つの手段であり、これを用いる技術の開発は大きな挑戦である。三菱ふそう・トラック社は、男性、女性、ポルトガル人、日本人である多くの従業員が共に大きな挑戦に立ち向かい、新しい「eCanter」を作り上げたことは、賞賛に値することである。

(イ)ポルトガルが経済危機に陥っていたこの4～5年間、ポルトガルで活動する企業は困難に直面してきたが、この経済危機から脱却し、更なる投資、輸出が増加している中で、本日トラマガル工場を訪問し、ポルトガルの国、市、人々、経済、社会に対する新たな希望を見ることができた。三菱ふそう・トラック社が、ポルトガルで「eCanter」の生産を開始することは、ポルトガルに活力を与えるであろう。

(ウ)(日本大使も同意されると思うが)、ポルトガルにおける「eCanter」の生産開始は、何世紀にも亘るポルトガルと日本の友好な二国間関係の象徴であり、ポルトガルの大統領として、本日は非常に喜ばしい日であり、ポルトガル人の一人としてお礼を申し上げたい。

このように、ソウザ大統領は、三菱ふそうトラック・バス社が、川崎工場とトラマガル工場で電気トラックの生産を始めたことについて、対ポルトガル投資及び環境問題対策としての重要性を認識し、「何世紀にも亘るポルトガルと日本の友好な二国間関係の象徴」として位置付けて頂きました。また、「ポルトガル人と日本人が一緒になって電気トラックの生産に携わっている姿を見ることができて大変嬉しい」とも言って頂き、今後も両国の企業間で、最新のテクノロジーの分野での協力・協働を支援して参りたく存じます。



大統領等との写真



大統領とふそう職員写真

以上のとおり、6月、7月にも経済、文化、姉妹都市交流等広範な分野で日・ポ二国間関係強化の動きがありました。特に、日本から初めてとなるチャーター直行便のリスボン空港到着は未来の定期直行便就航に向けての第一歩と位置付けることもできます。また、三菱ふそうトラマガル工場での電気トラック「eCanter」の生産開始については、上記のとおり、ソウザ大統領から、「対ポルトガル投資及び環境問題対策」として、かつ「ポルトガルと日本の友好な二国間関係の象徴」として高く評価されました。更に、6月の「日本祭り」に際しましては、昨年にもまして多くの方に御来訪いただきました。御支援・御協力頂きました皆様方に心より感謝申し上げます。

8月に入り、夏季休暇中の方も多いかと存じますが、8月30日-9月2日までリスボンで開催予定の「第15回 EAJS 日本研究国際会議」に世界中から900名もの日本研究学者がリスボンに参集する機会に、ポルトガルで現在高まりつつある日本への関心、熱い視線を日本文化への深い理解、両国の友好関係の強化につなげていきたいと考えておりますので、引き続き皆様の御支援、御協力をお願い申し上げます。